青山学院大学教育学科

同窓会だより

青山学院大学
教育学科同窓会
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学教育学科研究室
ＦＡＸ 03-3409-1528

2018年10月20日　第19号

歴史への畏敬

教育学科同窓会会長　比佐　實

『歴史は、現在と過去との対話である。』余りにも、有名な文言です。

歴史家 E. H. カー（英国 1892－1982 年）は、著書「歴史とは何か（What is History? 1961 年)」の中で、『歴史は、現在と過去との会話である。』を繰り返し論じています≪訳者 清水幾太郎氏、「歴史とは何か」1962 年（岩波新書）として出版≫。

清水幾太郎氏（社会学者。故人 1907－1988 年）は、「歴史とは何か」のまえがきで、『歴史は、現在と過去との対話である。』の意味・心構えとともに、次のように指摘しています。

“われわれの周囲では、誰も彼も、現代の新しさを語っている。「戦後」・「原子力時代」、「20 世紀後半」・・・・しかし、遺憾ながら、現代の新しさを雄弁に説く人々の、過去を見る眼が新しくなっていることは極めて稀である。過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に摑めないであろう。”≪（岩波新書）より引用≫

それから、半世紀以上の時間が経過しています。何も掴めていません。「20 世紀後半」が 21 世紀を迎えたことのみ。「戦後」・「原子力時代」は、いずれも未解決のままです。要は、“過去を見る眼が新しくならない限り、現代の新しさは本当に摑めない”ということです。

今・現代の新しさは何か。グローバル、IT・AI、地球社会共生等の現象が蔓延しています。客観的認識にいたることができるのか。これを超えることができるのか？ M. ヴェーバーの方法的概念である理念型（Idealtypus）を持ち出すまでもありません。この時代・この社会に生きる私たちにつきつけられた課題・使命です。

※元青山学院大学教授 清水禮子氏〈故人〉は清水幾太郎氏のご令嬢。

CONTENTS
会報第19号

巻頭言　歴史への畏敬（比佐　實（’73））…　1
ＡＩ時代の教育(学)（教育学科教授　野末俊比古）…　2
2018年度教育学科同窓会主催講演会録…　3～7
講演会の感想（戸田美紀子（’69））
クラス会報告（浦上 義夫（’59）島 光洋（’61））…　8
わたくしの今…　―皆さんの三行消息―…　8～11
会費納入一覧…　11
2018年度（第19回）総会報告…　12

野末 俊比古先生

本年度も大学同窓祭(9／23)に出店しました！

当日はお天気も良く、「バナナ」「お花」「お茶」「雑貨類」の販売をすることができました。お手伝いに賛同してくださった皆様、そして当日、足を運んでくださった同窓会の皆様、ありがとうございました！！　（竹田 治世）

AI時代の教育（学）

――シンギュラリティをめぐる雑想――

教育学科教授　野末 俊比古

シンギュラリティ（技術的特異点）とは、AI（人工知能）が人類の知能を越える時点を指す概念である。一般に2045年ごろに達すると言われている。コンピュータが人間を支配するSF的な世界がイメージされるかもしれない。コンピュータは人間が命令を与えて動くものだから、人間が適切な命令を与える限り、そうした世界は訪れないという見方もあるが、残念ながら安心はできない。本学シンギュラリティ研究所が主催した講演会に登壇した中島聡氏――氏はWindows95の開発者として知られており、現在は自動運転の企業経営などを手がけている――によれば、シンギュラリティがもたらすのは、人間が理解できない仕組みで動くAIを、AI自身がつくり出す社会である。人類を越える知能を持った新しい生命が地球上に誕生するという捉え方が正しいかもしれない。

だからこそ、人類とAIがどのように「共存」するのかが大きな課題となっている。もっとも、私たちの知能では新しいAIを理解することはできないので、極論すれば、シンギュラリティを迎えた社会を私たちは想像（あるいは創造）することは難しい。したがって、中島氏のいうとおり、重要なのは「プレ」シンギュラリティの社会をどうつくるか、人間がどう生きるかであろう。まさにいまここからの社会・人間のあり方が、来たるべきシンギュラリティを迎えた社会・人間のあり方を決めるのである。

望ましい社会・人間のあり方について考えるためには、理工系（だけ）でなく、文科系の「知」が必要となる。人文・社会科学における総合科学である教育学ももちろん含まれる。

学校の授業における教師を例にとって考えてみよう。教師は、子どもたちの言動・表情などから、理解度はもとより、興味・関心、感情・心理などを読み取って、説明の仕方を変えたり、新しい資料・問題を用意したり、といった柔軟な指導を展開する。しかし、臨機応変な指導は、もしかするとAIのほうが得意かもしれない。優秀な大勢の教師たちが過去に蓄積してきた知識・経験（集合知）を「学習」（ディープラーニング）したAIは、人間では考え及ばないような、人間よりも適切な指導ができるかもしれない。

あるいは、VR技術などの進展・普及を前提とすれば、学校に行かなくても、自宅でもどこでも好きな場所でバーチャルな「教室」の「授業」に「出席」して“AI教師”の指導を受けられるようになるかもしれない。教師（人間）ひいては学校（物理的空間）は役割（の多く）を失うかもしれない。さらにいえば、AIという「外部知能」が身近にあるならば、そもそも人間自身が学び、考える必要自体が（少）なくなるかもしれない。

むろん現実はそんなに単純ではない。しかし、私たちはいま、教師や学校、さらには教育（学習）すら不要になるのではないかという問い――現時点ではあくまで「可能性」であるが――に対して、明確・明快に答えることができるだろうか。かかる問いに答えるためには、さらに根源的な問い、すなわち「教師とは何か」「学校とは何か」「教育（学習）とは何か」といった問いに対する答えを持っていることが必要であろう。“次の時代”において（も）通用する答えを私たちは持っているといえるだろうか。

“そのとき”が来てから考えるのではおそらく遅い。答えを考えるために残された時間は意外と短い。そもそも、古くて新しいこれらの問いについて考えることは、将来のためというよりも、いまこのときの教育をよりよいものにするために必要なものであるはずである。大げさかもしれないが、AIが教育学（ひいては人文・社会科学全般）にもたらすものは、学問の「原点」に立ち戻ることかもしれない。

（プロフィール）
のずえ・としひこ　2000年より青山学院大学に勤務。専門分野は教育情報学・図書館情報学、関心領域は情報リテラシー教育。本年度から本学に設置されたシンギュラリティ研究所において「近未来の図書館と新しい学び」研究プロジェクトのリーダーも務める。

教育学科同窓会主催　講演会

▲▼△▽▲▼△▽▲▼△▽▲

とき　：2018 年 5 月 12 日（土）14：30～16：30
ばしょ：青山キャンパス総研ビル 9 階　第 17 会議室

歴史の狭間に埋もれた教育界の偉人
～フリッツ・カルシュ（1893－1971 年）～

東京医科歯科大学名誉教授　若松 秀俊

◇ 若松秀俊先生のプロフィール◇

システム工学者。専攻は生体機能支援システム工学で、「脳低温療法の自動化を進める機器システムの研究・開発」が専門。また、「情報ネットワークを用いた介護から救急医療にいたる遠隔医療福祉システム」の研究・応用にも従事
横浜国立大学工学部電気工学科卒業・同大学院工学研究科修士課程修了
東京大学大学院工学系研究科より工学博士の学位取得
現在は東京医科歯科大学名誉教授・中国武漢地質大学システム制御学客員教授
松江観光大使

［ 講演会に向けて ］

2018 年度の教育学科同窓会の講演会は、講師に若松秀俊先生（東京医科歯科大学名誉教授）を招き開催されました。テーマは、『歴史の狭間に埋もれた教育界の偉人～フリッツ・カルシュ（1893－1971 年）～』。1925 年（大正 14 年）から 14 年間にわたり、松江（旧制松江高等学校 現島根大学）で教鞭をとられたドイツ人学者・教育者のストーリーです。

私は、カルシュの存在を若松先生の著書により知りました。ドイツ人カルシュと松江との関係を知ることはもちろんですが、それ以上に、松江を第二の故郷と称したカルシュの生き方に興味を覚えました。それに、若松先生のカルシュへの関わりついても興味を誘われました。

若松先生は、システム工学者として多岐にわたり活躍されています。ご専門は「生体機能支援システム」で、『脳低温療法の自動化を進める機器システムの研究・開発』の第一人者として、国内外で、学者・教育者としての研究・実践活動をされ、また、『情報ネットワークを用いた介護から救急医療にいたる遠隔医療福祉システム』の研究・応用にも取り組まれています。

この専門領域に加え、教育及び文化的領域等の研究活動も積極的です。教育的領域では、東京医科歯科大学で将来の医療を支える大学院学生のため、過去 18 年間にわたり、「仁術は人間性から」という信念のもと、総合講義を通して広範囲で高度な一般教養を導入し、実践されました。また、旧制高等学校教育と現在の大学教育との比較研究を行っています。

そして、文化的領域として、今回のテーマである フリッツ・カルシュ に関わる活動があり、1999 年以来、長きにわたり調査・研究に携わり、その成果を著書、講演会等で精力的に紹介しています。

講演会では、約 20 年にわたる フリッツ・カルシュ の調査・研究の成果を踏まえ、出会いから今日に至るまでの足跡を辿ります。

若松先生は、ご出身（福島県いわき市）、ご専門ともに、松江・カルシュとの接点は全くありません。無縁の存在です。その若松先生を、カルシュの調査・研究へと突き動かしたのは、若松先生の学問に対する情熱と真摯な姿勢、そのものであると理解しています。

（比佐　實　経済学部 1970 年卒・教育学科 1973 年卒）

今回のフリッツ・カルシュに関わる講演内容は、教育学科同窓会が、若松先生の講演・新聞記事・著書等を参考に取りまとめました（文責・比佐 實）。

なお、掲載された写真は、すべて、若松先生より提供していただきました。

はじめに

若松先生は、カルシュについて、様々なエピソードを交えて紹介します。

ドイツ人哲学者“フリッツ・カルシュ博士”（写真・1893－1971 年）は、1925 年から 14 年間にわたり、旧制松江高等学校（現島根大学）で教育に力を注ぎました。彼は学者・教育者であるとともに、日本の哲学や宗教の研究家であり、1940 年から 5 年間は外交官でもありました。

彼の薫陶を受けた著名人には、放射線医学が専門で『長崎の鐘』の著者としても知られる永井隆、免疫学の奥野良臣などの医学者、政治家の赤澤正道福永健司、細田吉蔵などの政治家、『暮しの手帖』で知られる花森安治の名前も見られます。また、当時の朝鮮、台湾からの生徒で、戦後に故国の復興に尽力した有能な医師、技術者なども含まれ、その他、文学者、法律家、外交官など枚挙に暇がありません。（敬称は略させていただきました。以下同じ）

また、カルシュには、多くの哲学者（三笠宮崇仁殿下、西田幾太郎、鈴木大拙、高橋敬視、長屋喜一）との交流についても確認されています。

カルシュは、学者・教育者としての功績は言うに及ばず、専門著書・関連著書、それに数多くの優れたパステル画、歴史的写真など、膨大な未整理の研究原稿を残しています。しかし、カルシュの存在は、戦中・戦後の混乱の中、地元松江の人々にも知られず、歴史の狭間に埋もれたまま現在に至っています。同じ松江でよく知られているラフカデオ・ハーン（1850－1904 年）と並ぶ功績を残しているにもかかわらずです。

若松先生は、カルシュについて、その足跡が広く多くの方々に知られることを念じ、1999 年以来、日本国内、ドイツ及び米国で調査・研究活動を行っています。

カルシュとの出会いと研究の契機（きっかけ）

若松先生は、カルシュとの出会いを語ります。

現在、カルシュの調査・研究を始めてから約 20 年になりますが、それまでには多くの偶然が重なりあう中、ある出会いがカルシュ研究へと駆り立てることとなりました。

それは、若松先生がドイツ学術交流会奨学生（エルランゲン・ニュルンベルク大学研究員）として渡独（1973 年－1975 年）してから約四半世紀後に、カルシュの遺族との出会いがあったことです。1999 年、シュトゥットガルトのフリーデン広場にあるホテルで、カルシュの次女フリーデルン（日本名ヒデコ）との間の偶然の小さなできごとから始まりました。朝食時の僅か 5 分間ほどの会話、そして、そのとき手にした彼女の連絡先を記すたった 1 枚の紙片の存在がすべてでした。

人を運命づける宿命的な出会いということでは、カルシュと松江（日本）の出会いも、思いがけないものでした。それは 1911 年（明治 44 年）、ドレスデンの万国博覧会のときに出会ったラフカデオ・ハーンの著書から得た日本についての知識からでした。カルシュは、松江に『神々の里に見た美と安らぎ』の場を感じたようです。

調査・研究をもとにして得られた膨大な資料と写真から、カルシュの当時の生活や生徒との交流はほぼ再現できましたが、調査を始めて間もない頃に協力してくれたカルシュの愛弟子はほとんどがすでに他界しており、彼らの残してくれた言葉や手紙をときに想い出す、と若松先生は語ります。

ドイツの文化と風土に、若き日に触れる機会をドイツ政府から与えられた若松先生が、シュトゥ

ットガルトの小さなホテルで、カルシュの次女に偶然に出会い、このような調査・研究に携わることになったのは、自分に賜わった天命（calling）と考え、顕彰に尽力してきたとのことです。若松先生のカルシュの調査・研究に対する考え・姿勢が現われています。

カルシュと松江

さらに、若松先生はカルシュと松江について言及します。

今から 100 年以上も前の 1910 年代、ヨーロッパは大きな戦乱が相次ぎ、人心は荒廃の域にあり、また、急速に発展しつつあった自然科学の成果がもたらした物質崇拝の風潮が全土を覆っていました。カルシュの故国ドイツも、その例外ではありませんでした。1925 年、その中で、深刻な失業の苦しみと社会不安が渦巻くドイツ・マールブルクから、一組の夫婦が、昔ながらの生活を営み、都会とは全く趣を異にする松江の地に、旧制松江高等学校（現島根大学）の外国人教師として足を踏み入れました。これが、カルシュと松江の関わりの始まりです。

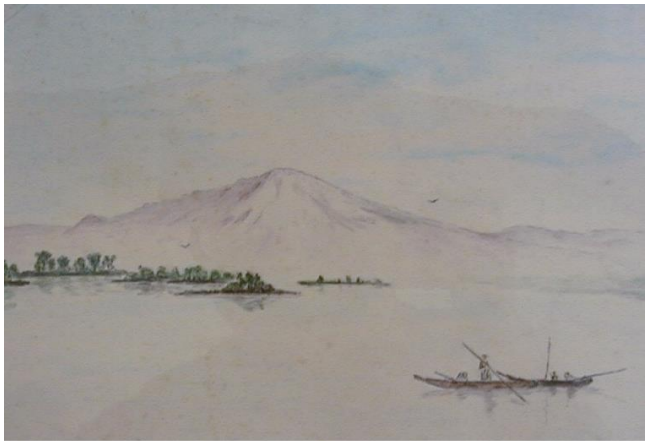
カルシュは、松江市奥谷町の「官舎」（左写真）に居を構え、ここを拠点として、松江はもちろんのこと、日本固有の自然と文化（生活）に触れ親しみ、愛し、その美しさを説くことになります。２、３年で帰るはずが 14 年にも及び、松江が第二の故郷にまでなりました。

カルシュが住んだその「官舎」に、一時、取り壊しの決定がなされました。しかし、地方新聞社との共同の保存呼びかけが文化財登録への道を開き、2009 年 10 月に、保存・修理の運びとなった経緯があります。カルシュの存在が、調査・研究の進展とともに、報道機関・松江郷土館の企画展示会・日独協会の顕彰記事もあり、世の中に知られるようになりました。それが、ＮＨＫ松江放送「しまねっと：ドイツ人の住宅を保存へ」と進展し、島根大学による文化財登録の申請となったものです。そして、今、その「官舎」は、歴史的価値とともに、『記念館』としても、その役割を果たしています。やがて、カルシュの遺品（膨大な哲学の未発表原稿、写真、絵画、調度品など）も、広く世に公開できるものと期待されています。

松江での生活と学校　―自然との共生・近隣との共生・神々との共生―

若松先生は、カルシュと松江についての言及を続けます。

カルシュは、ヨーロッパとは異なる異質の文化に対する知識と異国への憧れとともに、松江での生活を享受することとなります。カルシュは、「官舎」で家族とともに安らぎを覚え、ドイツとは全く異なるやわらかな雰囲気の佇（ただずま）いが残る松江の町並みの中で、近隣の人々との密な交流・生活を楽しみました。そして、ここ松江で、象徴的な多くの歴史、自然の事象に遭遇することになります。松江城、神社仏閣等の歴史に触れ、近隣の山々を訪ね、慣れ親しんだ枕木山からは夕日に映える陸と海を瞰望し、朝日山からは宍道湖大山、隠岐島への眺望を楽しみました。そのことは、カルシュの言葉に、次のように表現されています。「この出雲の国の老木鬱蒼たる神社仏閣の美しさ…、海－入江－島嶼（とうしょ）…さては遥かに淡く輝く隠岐の国の山々を配して青く透き通った日本海の美しさ。それはもう、何にも例えようのない美しいものなのです」。ハーンにより知った東洋の神秘と、ヨーロッパには存在しない価値の多様性に神々との調和を、松江



（写真はカルシュ自筆のパステル画「枕木山から望んだ大山」）

で経験したことがカルシュにとって重要であったのです。このように、松江の美しさに魅せられたカルシュは、当時の生徒に語りかけます。「こんな風光明媚な地で勉強できる諸君は幸せである」と。

学校の講義、生徒との対話では、ヨーロッパの精神を伝えるために、自らの学問的立場を踏まえ、西洋と東洋の文化の比較を、出雲地方のそれ（伝統・歴史への敬虔さと深遠な品格を備えている）を通して行っています。カルシュがこの境地に至ったのには、彼が子供の頃、大山に似た景色を何度も夢に見たという、大山との終生の因縁が関係しているように思われます。そして、講義の中で、生徒に語りかけます。“ 西暦 2000 年頃、ヨーロッパ文明が自己矛盾から、他との軋轢が各所で生じる ”という注目すべき記録を見ることができます。同時代の歴史家 オスヴァルト・シュペングラー（ドイツ)やアーノルド・J・トインビー（英国）も同様な認識（歴史を相対化する）を有していましたが、この時代に、生徒に向けて語られたことに、カルシュの意義を見出さざるを得ません。

（写真は松江高等学校で撮影されたカルシュ父娘と生徒たち）

何よりもカルシュにとっては、近くの神社とその雰囲気が、彼の自然観・人間観・歴史観に、それに思索に直接的な影響を及ぼしていたようです。これが、カルシュの講義、生徒との対話（かかわり）に滲み出ている思いがします。

現代日本の教育への影響

若松先生は、カルシュの影響について、ルドルフ・シュタイナー（1861 年－1925 年）との関係で言及します。

カルシュは、現代の教育に大きな影響を及ぼしている人智学と哲学者シュタイナーを日本に紹介した大きな功績があります。一般的には、戦後に紹介されたと言われていますが、1925 年に来日したカルシュ夫妻が交わした 1923 年当時のシュタイナーに関するノートが現存し、スイスのゲーテアヌムのシュタイナー信奉者同士の交流も確認されています。シュタイナー思想の流布については 1934 年を境にヒトラーによって禁じられましたが、カルシュが、密かに日本国内で、広めていたことが知られています。

戦後、これが復活して、日本でもシュタイナー学校が創られ、最近では一貫教育の象徴となっており、教育史上、カルシュは、重要な位置を占めています。現在、長女メヒテルトは、米国でシュタイナー教育の中心的役割を担っており、次女フリーデルンは、戦後のシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校）出身で、マールブルク大学で政治学、地理学の 2 つの学位を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校で、シュタイナー教育に永年携わり、現在も、継続的に活動しています。そして、直接彼女から二代にわたって教育を受けた日本人にも辿りつくことができるほど、カルシュの影響の拡がりを世界的に見ることができます。

カルシュの周辺

若松先生は、カルシュをさらに理解するためには、カルシュの関係者（親類縁者等）についても言及する必要があると語ります。

その一人に 1937 年、ショパンコンクールで入賞したピアニスト・チェンバリストのエディット・ピヒト・アクセンフェルト（元フライブルグ音楽大学教授）がいます。彼女は多くの日本人弟子を残し、日本国内（草津等）で定期音楽会を催すなど、日本と深い関係にあります。それから、モラクセラ・ラクナ―タ菌を発見し、現在の眼科学に大きな影響を及ぼした世界的権威のテオドール・アクセンフェルト博士（元フライブルグ大学教授）がいます。また、長女メヒテルトの夫 ヘルベルト・セイント・ゴアールは、「ヒトラーの行動記録（16 ミリ）」を、戦後ミュンヘンでハンス・バウ